



のと海洋ふれあいセンターだより

の と かい ちゅう りん
能 登 の 海 中 林

NEWS LETTER OF NOTO MARINE CENTER No.8 Mar.1998



<目次>

九十九湾で見つかったイチモンジハゼ.....坂井 恵一...2

磯の小動物の能登方言.....馬場 宏 ...4

事業紹介 海と人と生きものの講演会.....高井 功 ...6

トピックス.....7

センター誌と観覧路だより.....8

平成10年3月

九十九湾で見つかったイチモンジハゼ

坂井 恵一

8年5月31日、九十九湾の長波瀬と呼ばれる水深10m程の岩場で、潜水調査をしていたときのことでした。私にとって、これまで能登では見たこともない、名前も分からない、小さな魚を2匹見つけました。

この2匹の魚は、岩穴の中で頭を斜め下に向け、並んでじっとしていました。残念ながら、このときは魚を採るタモ網さえ持っていなかったため、とにかくこの魚の特徴を覚え込もうとしました。しかし、深さが10mほどあるので周りは薄暗く、しかも魚は穴の中なのであまり良く見えません。しばらくすると、その二匹は小さな岩の窪みの中に逃げ込んでしまい、姿を消してしまいました。記憶に残ったのは大きさが3cmほどの小さい種類で、体には頭から尾ビレにかけて一本の黒い縦じまがあること。そして、実にすばらしい魚であることぐらいでした。

その年の7月11日、今度はあらゆる採集道具を準備し、5月と同じ場所に潜ってこの魚の採集に挑みました。幸運にも、一匹だけでしたが、やはり岩穴の中にひそむ同じ魚を見

つけることができました。

空気ポンペを背負っての潜水ですから、こちらはあまり自由に動けません。しかし、ポンペの空気に余裕があったので、ゆっくりと慎重に格闘した結果、この一匹の魚を捕まえることができました。

研究室に持ち帰り、顕微鏡を使って調べたところ、腹のヒレが吸盤になっていないものの、どうも小型のハゼの仲間であることが分かりました。実は、ハゼの仲間でありながら腹ビレが吸盤になっていない変わり者がいます。イソハゼ属とベニハゼ属の魚が代表的です。この内、イソハゼ属のイソハゼは、九十九湾の磯の観察路でもほぼ一年中見つけことができます。そして、この時採集した魚は、石川県はもちろん日本海でも見つかったことのない、ベニハゼ属のイチモンジハゼであることが分かりました。

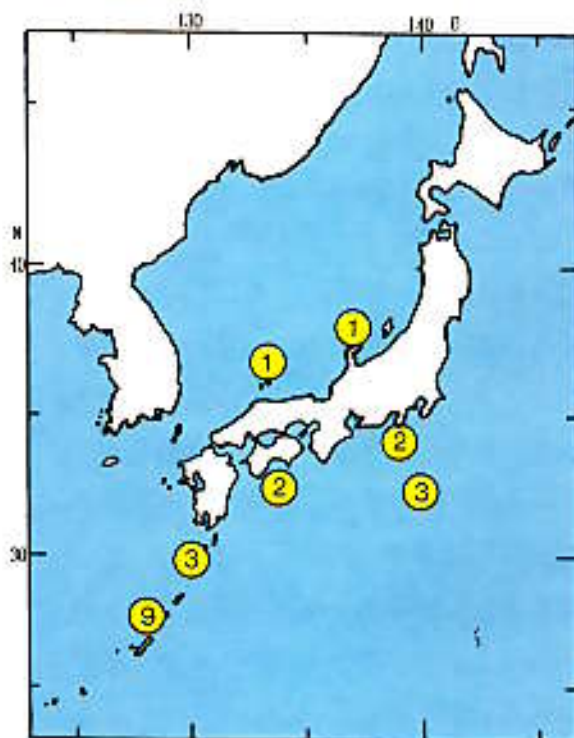
ベニハゼ属の魚は、日本では10種類ほど見つかっています。どの種類も大きくなっても全長で5cmほどにしかならない小型の種類です。主にサンゴ礁が広がる暖かい海に生息



九十九湾で見つかったイチモンジハゼ



磯の観察路にも多いイソハゼ



日本におけるベニハゼ属魚類の種類数 (○内数)

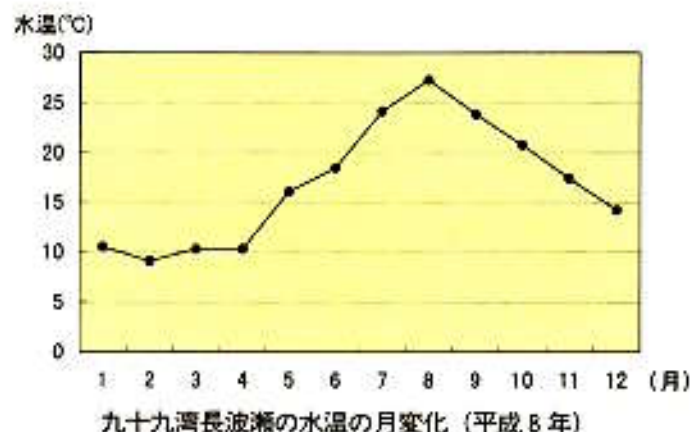
して、沖縄あたりでは9種類が見つっています。ところが、北に移るにしたがって種類数が減り、太平洋側の伊豆半島や四国で2種類、八丈島で3種類が見ついているに過ぎません。イチモンジハゼは、ベニハゼ属の内では最も北に分布している種類ですが、日本海側から見つかったことはありませんでした。

イチモンジハゼが能登半島の九十九湾で採集されたことにより、この魚の分布域が一気に北に広がったことになりました。その後、この魚が島根県沖の隠岐島にも生息しているとの情報が寄せられました。また、平成9年の8月には、もう一匹のイチモンジハゼを九十九湾内で採集することができました。体が小さい上、少し深い場所の主に岩穴の中などに生活しているので、これまで見つからなかったものと思われます。では、どうしてこのような暖かい海に住むイチモンジハゼが九十九湾で見つかったのでしょうか？

能登では、夏から秋にオヤビッチャやソラスズメダイなどの、本来は能登より南の海で生活している色鮮やかな磯魚が良く見つかります。しかし、これらの魚達は、能登の冬の冷たい水温に耐えることができず、春にはまったく姿を消してしまいます。しかし、イチモンジハゼが最初に見つかったのは5月下旬です。この頃、九十九湾の水温はまだまだ低く、およそ16℃くらいです。冬眠から目覚めたキュウセンやホンベラなどが活動を始めたばかりで、色鮮やかな南の磯魚はまったく見つかりません。また、その年の7月には5月とほとんど同じ場所で、そして次の年の8月にもこの魚が九十九湾で採集されました。これらのことから、イチモンジハゼは冬の低水温にたえて生きのび、九十九湾で1年中生活しているのではないかと考えられるようになりました。もしこのことが正しいのなら、日本海でもベニハゼ属の魚が定住していることになるのです。

今後、このイチモンジハゼが本当に九十九湾で一年中生活しているのか？もしそうだとすると、何月ごろに卵を産むのか？などの証拠を見つける必要があります。また、能登半島の別の場所でも探してみたいと思っています。そして、この魚の発見の情報が、佐渡島や若狭湾などから寄せられることを期待しています。

(普及課長)



九十九湾長波瀬の水温の月変化 (平成8年)

磯の小動物の能登方言

馬場 宏

私達のふるさと「能登」で、祖先達は磯に住む小動物を、どのように呼んできたのかについて調べました。今回は、全国で共通の呼び方とされている標準和名をカタカナで、方言はひらがなで書きます。なお、能登以外での使用地は文末の図書を参考にしました。

アメフラシ

うみうし（輪島市等）—シロウミウシやアオウミウシ等の「ウミウシ類」と異なります。

うみべこ（珠洲市狼煙）

おんべこ（外浦全域・内浦町布浦・能都町・七尾市石崎）

うみでっこ（珠洲市三崎）

うみぼっこ（内浦町松波）—べことかでっこ、ぼっこは「牛」を示す能登の方言です。

うみねずみ（珠洲市）

うみねこ（能登島町等）—猫ほどの大きさのアメフラシがいるのでびっくりします。能登以外で、アメフラシをうみねこと呼んでいる所は、岩手県や愛媛県があります。

ちーだしばばさ（内浦町等）

いんきだしばば（七尾市三室）—からだに触れると、紫色の液を出すことから名付けられました。

アメフラシには、この他にも沢山の方言があります。

ウニ

海胆、雲丹、または海栗と当字されます。種類が多いので、ムラサキウニを調査しました。はりせんぼん・はりせんぼ（珠洲市正院付近・内浦町・能都町等）—はりせんぼんは、同じ名前と呼ばれている魚の「ハリセンボン」が良く見つかる所では使われていません。

がんじゃ・がじゃ（珠洲市）

がぜ・かぜ（輪島市・穴水町・能登島町・富来町等）

かじ（志賀町）



アメフラシの方言の分布



ムラサキウニ

がぜ・かぜ・がじは、「ウニ」のことを古い時代に「加世」と呼んでいたことから、そう呼ばれるようになったものと思われます。この呼び方は、能登以外では北海道・佐渡島・長崎県等で用いられています。

小型巻貝

ここに示したのは、スガイ、クボガイ、イシダタミガイ等の小型の巻貝を、種類を区別しないで表わす呼び方です。

しただみ（中島町・穴水町・七尾市・能登島町・志賀町）—これは古事記等の古典にもよく出てくる呼び方で、特に万葉集にある大伴家持が中島町の机島で詠んだ歌が有名です。

しただめ（しただみを用いる市町村に隣接した地域）—しただみのみかめに変わったものです。

だめ（輪島市・門前町）—しただめのしたを省いた呼び方です。

びんな（穴水町比良）

べんび（穴水町中居）

さざえめっこ（七尾市大泊）

しただみは非常に古い言葉です。能登以外では秋田県・千葉県・香川県等で用いられています。



「しただみ」と呼ばれるヘソアキクボガイ

ヒトデ

海星と当字されます。

がんのまくら（中島町・穴水町・能登島町・富来町等）

たこのまくら（がんのまくらに隣接の市町村）

たこまくら（輪島市等）—呼び方の一部が変わったり、省略されることとその地域との関係は、小型巻貝のしただみの場合とよく似ています。なお能登以外では、佐渡島・千葉県・鳥根県で用いられています。

ほし（珠洲市・羽咋郡南部）



ヒトデの標準和名は「キヒトデ」に変わっています

ミズクラゲ

べこ（珠洲市折戸以南・内浦町・能都町・穴水町西部）

べら（能登島町・七尾市）

おべれんこ（内浦町小木）

くらげ（外浦全域・穴水町～七尾市）

能登半島には、しただみのような古い言葉が残っている一方で、くらげのように新しい言葉が広く伝播しているものもみられます。また、能登だけで使われている方言だと思っていたら、はるか北海道や九州地方でも用いられていることを知りました。海は続いており文化を温存する反面、交流を発展させるものなのですね。



クラゲ類のなかでも一番ポピュラーなミズクラゲ

参考図書

川名典、1988：日本貝類方言集，未来社
尚学図書，1989：日本方言大辞典，小学館

事業紹介 海と人と生きものの講演会

—クジラとイルカからのアプローチ—

筒井 功

海と人と生きものの講演会は、身近な生きものを題材に、自然と人と生きものがどのような関わりをもっているのかを理解していただくことを目的としています。第一回目の今回は、古代から能登地方になじみの深い鯨類について、石川県と内浦町、日本海セトロジー（鯨学）研究グループの後援をいただいで開催しました。平成9年12月14日(日)、会場となった内浦町小木地区活性化センターには、およそ70名が集まりました。

最初の講演は、国立科学博物館動物第一研究室の山田 格先生による「クジラとイルカ、そしてヒト」でした。海にすむほ乳類の区別のかたや鯨類の体のようす、生活場所などに加え、食べ物とまちがって飲み込んだビニール類が、死んで打ちあがった多くのイルカの胃から出てくることなど、幅広い内容についてお話くださいました。

次は、金沢医科大学歴史・人類学研究室の平口哲夫先生による「古代日本海の鯨類と人間」です。内浦町や能登町の縄文遺跡から見つかった多くの石やりとイルカの骨の特徴から、能登の縄文人たちがどのようにイルカ漁をしていたのかについて、また韓国の洞くつに残る鯨類の壁画や中国・日本の古文書の鯨類に関する記述から、古代の日本周辺ではどのあたりで鯨類が見られたのかなどについて、考えを話されました。

最後に当センターの坂井恵一普及課長が、県内の例として、内灘町に漂着したハナゴンドウ（小型のイルカ）の胃袋に、スーパーマー

ケットの買い物袋やインスタントラーメンの袋などがぎっしりとつまっていたことなどを紹介しました。

水族館やテレビではよく見かける、親しみやすい鯨類であるのに、わかっていないことが随分と多いこと、アメリカによる大規模な捕鯨が江戸から明治時代の日本海周辺で行われていたこと、身近な海に漂着する鯨類も多量のゴミを飲み込んでいることなど、とても多くのことに驚きを感じました。参加者にも感想を聞いてみると、ある方は「クジラ・イルカ類の骨格と水圧の関係がとても興味深かった。」と、またある方は「古文書からでも鯨類の生活場所が想像できるなんて…」とそれぞれ話されました。このように様々な方々が今回の講演会を楽しめたのは、先生方の興味深いお話がとてもわかりやすかったことに加え、テーマが鯨類という誰にでも愛される動物についてだったからだと思います。

今後ものと海洋ふれあいセンターでは、身近で親しみやすい海の生きものについて、講演会を開催してゆきたいと思います。

（普及課技師）



トピックス

ウミボタル

坂井恵一

「近年、日本海沿岸からウミボタルが姿を
 けたようだ」といううわさを耳にしまし
 ました。

ウミボタルはきれいな砂浜海岸に住む貝ミ
 ジンコの仲間です。体は貝のような二枚の殻
 で包まれていて、大きさは3ミリほどです。
 このウミボタル、体の内で光を発生させる化
 学物質を造る発光生物として有名です。指で
 ふれると、まるでホタルのように青白い鮮や
 かな光を発生させます。

太平洋沿岸では普通にみられる生息量が多
 い種類ですが、日本海沿岸はもともと少な
 かったようです。金沢大学臨海実験所の又多
 さんは九十九湾内でも採集したことがあると
 のことですが、今ではいないようです。私も

能登島町の鰻目^{うなぎめ}で捕まえたことがあります
 が、もう13年も前のことです。

そこで、平成9年11月、内浦町の五色ヶ浜
 でウミボタルの採集を行い、この発光生物が
 今でも健全に生息していることが確認できま
 した。実はほっとしています。(普及課長)



ウミボタルとその光

フサイワヅタにかくれんぼ

福島広行

フサイワヅタは、潮通しの良い浅い岩場で見
 られる多年性の緑藻で、磯の観察路の特に
 ヤドカリコースでたくさん観察できます。こ
 の海藻に隠れて生活するちよっと変わった
 後鰓類^{こうそくぐい}(アメフラシやウミウシの仲間)が
 いるので紹介したいと思います。

タマノミドリガイは、全身が緑色で、大き



磯の浅い場所にも多いフサイワヅタ

な2枚の殻^かを持った、体の大きさが1cmにも
 満たない種類です。一見すると二枚貝と間違
 えやすいのですが、しばらくそっとしておく
 と体を出します。それはナメクジとよく似て
 いて、2本のツノ^{すく}(触覚)を持っています。
 また、殻の上の方には、巻貝と同じように巻
 いた部分があります。

タマミルウミウシは、やはり全身が緑色
 で、背側にフサ状の突起がたくさんあり、体
 の大きさが3cmほどの種類です。

この2種は、体の色がフサイワヅタに良く
 調和しているので探すのが大変です。しか
 し、フサイワヅタは水面すれすれの浅い所
 にもたくさんあるので、この見つけにくい
 後鰓類^{こうそくぐい}も見つけることが出来るはず
 です。探してみてください。(普及課技師)

センタ一誌抄

1997 (H9) 年後期 (7~12月)

- 7/3 在阪道府県協議会第2部会の観光等振興研修会一行46名が施設見学
- 12 輪島市公民館主催の講演会において坂井恵一普及課長が講演
- 18 中島町公民館及び同町青年団協議会主催の青年教室に坂井恵一普及課長が講演
- 24 早立小松高校理数科生徒31名が臨海実習を実施
- 26 サタデースクール「貝殻クラブ」を開催19名参加
全国マリンスポーツフェア内浦大会が九十九湾園地を会場に開催される参加者117名
- 27 スノーケリング講習会を開催45名参加 講師：陸海中公園センター藤原秀一氏、いしかわ動物園松村初男氏、金沢大学臨海実験所又多政博氏
- 31 金沢大学社会教育主事講習会現地研修(家庭教育)一行27名が施設見学
- 8/1 輪島市公民館主催「親子磯の観察会」を指導 県至小の生徒とその保護者等100名参加

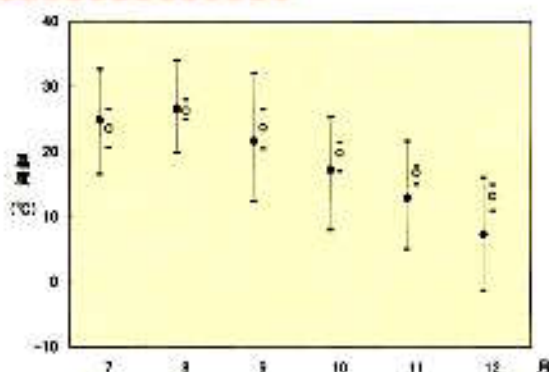


スノーケリング講習会の参加者

- 8/8 第10回ジャパンテント in 内浦町内地施設見学一行10名が来館
- 10 第11回磯の観察会を輪島市鴨ヶ浦海岸で開催13名参加
- 23 サタデースクール「海の生きものの名前調べ」を開催9名参加
- 9/3 のと海洋ふれあいセンター管理担当者会議を開催 参加者：自然保護課、御石川県健民公社、内浦町石川県少年自然の家連絡協議会、所長・次長他後研修会一行9名が施設見学
- 19 サタデースクール「魚釣りとお魚」を開催4名参加
- 27 08とやま環境財団(富山県)のナチュラリスト研修会が当センターを会場に開催される52名参加
- 10/5 第12回磯の観察会を珠洲市の木ノ浦海岸で開催50名参加
- 17 のと海洋ふれあいセンター運営協議会を開催
- 25 サタデースクール「タコを観よう」を開催6名参加
- 26 石川県環境保健センター主催の環境リーダー研修会が当センターを会場に開催される22名参加
- 11/22 サタデースクール「年賀状の板面造り」を開催18名参加
- 12/14 平成9年度磯の自然解説者研修会「海と人と生きものの講演会」クジラとイルカからのアプローチ」を内浦町小木地区活性化センターで開催71名参加 講師：国立科学博物館山田格動物学研究室長、金沢医科大学平口哲夫人文科学助教授

観察路だより

夏から秋にかけて、ペラ類やメジナなど様々な磯の小魚が泳ぎ回り、私たちの目を楽しませてくれました。秋には岩かげにマダコが多くなり、10月に行ったサタデースクールの参加者達は、タコ獲り名人の手ほどきを受け、大物を含めて8匹を釣りあげることができました。また今年の冬は、特にアメフラシが多いように感じられます。海藻類について、12月の中頃から例年どおり、波しぶきがかかる場所にオニアマノリが芽生え始めましたが、イシモズクが年末まで生育するなど、これまでの年とはちょっと趣を異にしていました。



1997年7月から12月の気温と水温の月変化
気温：午前9時に観測した月別平均値(●) 実績は月毎の最高と最低の気温の範囲を示す
水温：午前9時に観測した月別平均値(○) 実績は月毎の9時の最高と最低水温の範囲を示す

のと海洋ふれあいセンターだより 「能量の海中林」
通巻第8号 平成10年3月20日 発行
編集発行 のと海洋ふれあいセンター
〒927-0552 石川県珠洲市内浦町字越後3字47番地
TEL 0768 (74) 191910
FAX 0768 (74) 1920
印刷所 株式会社 橋本隆文堂

— のと海洋ふれあいセンター —

設置者：石川県(環境安全部自然保護課) 管理運営：御石川県健民公社
入館料：個人は高校生以上200円、団体(20名以上)160円、中学生以下は無料
開館時間：午前9時～午後5時(但し、入館は4時30分まで)
休館日：毎週月曜日(国民の祝日を除く)と年末年始(12月29日～1月3日)